



北方民族博物館だより

No.120



DR2.2.2 革製仮面

アサバスカン・インディアン/ノーザン・トゥショニー カナダ/ユーコン準州/ホワイトホース
21.5 × 21.0cm 2019年、Ukjese van Kampen製作

製作者が2019年に「第34回北方民族文化シンポジウム網走」参加のため来館した際に寄贈したものである。北方アサバスカンの仮面文化はエスキモー文化の影響が強いデギタン（インガリック）を除いてほとんど知られていないが、製作者の調査によるとユーコン地域でも、現存はしていないが仮面が存在したという。白人社会との接触後は木製の仮面も作られていたが、遊動生活が行われていた時代は、持ち運びが容易な革や樹皮で仮面が作られただろうと製作者は考えており、本資料はその仮説を元に復元したものである。革製仮面の類例は、北方アサバスカンであるデナイナなどに見られるという。

目次 Contents

- 1 表紙 革製仮面
- 2-3 企画展 "アマゾン博士"の北方紀行：山口吉彦氏旧蔵・北方民族コレクションより
／新収蔵資料紹介 山口吉彦コレクションについて
- 4 ロビー展 石の知る辺～アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド、先住民シネコックに鯨の物語をたずねて～
是恒さくら 本・刺繍・写真展
- 5 ロビー展 オホーツクシリーズ⑭ 北の状景から
／講習会 初めての歩くスキーツアー
- 6 INFORMATION

企画展

“アマゾン博士”の北方紀行 山口吉彦氏旧蔵・北方民族コレクションより

後援：一般社団法人アマゾン資料館、鶴岡市、東京農業大学生物産業学部

2021.2.6(土)-4.4(日)

会場：当館特別展示室

この企画展は、北方民族博物館が2019年度より収集してきた「山口吉彦コレクション」（以下、山口コレクション）の概要を紹介するとともに、コレクションの対象となった北方諸民族の文化に親しんでいただくことを目的としました。以下でその概要を紹介します。

〈山口氏のプロフィールと山口コレクション〉

山口氏は山形県鶴岡市に生まれ、少年時代に読んだ探検記などの影響で、南米・アマゾンに行きたいという夢を持つに至ります。東京農業大学卒業後、フランスへの留学を経て、1971年に在ペルー日本大使館付属学校に勤務することになり、念願のアマゾン行きを果たします。その後、1982年に帰国するまで、アマゾン各地で動物の剥製や先住民の伝統的な道具など、現在は入手困難なものを含め、約2万点の資料を精力的に収集しました。

帰国後に鶴岡市の自宅を改装し、私設の「アマゾン資料館」を開設しました。そして1994年に山口氏のコレクションを元に鶴岡市に「アマゾン民族館」が開館すると同時に館長に就任しました。その後、アマゾン民族館の特別企画展のため、自ら世界各地を訪れ、現地の民族資料を収集することになります。こうして集められた民族資料のうち、北方諸民族に関連する約670点が山口コレクションとして当館に収蔵されることになったのです（山口コレクションについては、3ページの記事もご参照ください）。この企画展では、そのうち130点を展示しました。

〈ナーナイの民族資料〉

ナーナイは、ロシア・アムール川中流域で、狩猟と漁労を伝統的な生業としてきた人びとです。ナーナイの民族資料は、1995年7月、11月と2度にわたり、ロシア連邦ハバロフスク地方のナイヒンなどで収集されました。伝統的な衣服や壁掛け、皿やスプーンなどの木製品、木偶やお守りのほか、ナーナイの伝統文化を特徴づける魚皮製の靴やバッグなども展示しました。特に色とりどりの鱗模様と刺繍で彩られた花嫁衣装は貴重な一品となっています。

〈北海道アイヌの民族資料〉

1996年頃に北海道白老町、平取町二風谷で収集されたものが中心となっています。白老では、観光客向けの民族舞踊を観覧した後、踊り手に頼み込んで着ていた衣装を譲っていただいたそうです。二風谷では、故萱野茂氏の紹介で、民族資料を集めたとのことでした。衣類、まな板などの木製品、樹皮製品のバッグなどを展示しています。

〈モンゴル、カザフの民族資料〉

モンゴル人留学生の案内により、山口氏が2000～2002年に3年連続でモンゴル国と中国の一部を訪問して収集した資料です。おもにモンゴル国の主要民族であるモンゴルと、



展示風景（カザフ資料）

モンゴル国では少数派であるカザフの民族資料で構成されています。「デール」と呼ばれるモンゴルの上着や帽子、乗馬用鞍、ヒツジの骨製玩具やフェルト製バッグ、カザフの花嫁衣装や全面に刺繍が施された大きな壁掛け、手織り紐など、それぞれの伝統的な遊牧文化に関連する資料を展示しました。

〈北方各地の諸民族資料〉

本企画展では展示スペースの制約もあり、上記以外の民族資料について一括して紹介しました。まず、2001年にロシア連邦サハリン州のユジノサハリンスクで収集されたニブフやウイльтаの壁掛けやアクセサリーなどを一つのケース内にまとめました。次に大きなケースの左側に2000年5～6月にアメリカ合衆国アラスカ州で収集されたエスキモーの仮面やブーツなどを、右側に同年8～9月にフィンランド北部で収集されたサミの資料から幼児用の衣服やナイフなどを展示しました。

〈北方民族の人形〉

山口コレクションの特徴として、土産物の割合が多いことが挙げられます。こうした土産物のなかでも人形は、それぞれの民族の伝統的な服装や美意識、世界観を知る上で貴重な存在です。このコーナーでは、ナーナイ、ニブフ、サミ、エスキモーの人形を集めて展示しました。

講演会 アマゾン民族館と北方民族資料

2.6(土) 10:00-11:30

講師：山口吉彦氏（アマゾン民族館元館長）

案内人：山口考彦氏（(一社)アマゾン資料館代表理事）

会場：当館特別展示室・講堂

企画展オープン初日には、開会式をおこなった後、山口吉彦氏による講演会「アマゾン民族館と北方民族資料」を開催しました。

最初に特別展示室で、参加者の皆さんにもご覧いただきながら、展示されている民族資料の特徴や収集時のエピソードについて説明いただきました。参加者の密集・密接を避けるため、個々の資料に関する説明はほんの一部に限定し、その後は講堂に移動して講演いただくこととしました。

講演では、講師の長男・考彦氏にも同席いただき、考彦氏からの問いかけに講師が答えるという形で話を進めてい



展示室で解説をする山口吉彦氏

きました。内容は、講師がアマゾンに行くことになった経緯やアマゾン各地で先住民の村を訪れた際の体験、アマゾン資料館やアマゾン民族館の活動内容、ロシア・ハバロフスク地方やアラスカ、モンゴルなど北方各地を訪問した際の出会いや資料収集時の苦労話など多岐にわたりました。最後にアマゾンと北方地域の共通点として、気候や環境は異なるものの、そこに暮らす人びとが自然のなかで生活し、自然を大切にする気持ちを持っているという点を挙げられたのが印象的でした。

当館の催しとしてはめずらしく、南米の話題が含まれていたためか、参加者の皆さんも特にアマゾンの先住民について興味津々の様子でした。

企画展解説講座

2.28(日) 13:30-15:00

解説：中田篤（当館主任学芸員）

会場：当館特別展示室

2月28日には企画展の概要を紹介する解説講座を実施しました。

最初は講堂で地図や写真をご覧いただきながら、山口コレクションの概要—山口吉彦氏のプロフィールやコレクションが作られた経緯、集められた資料の特徴、資料収集のために訪れた北方の各地域について紹介しました。なかでも、特に多くの資料が集められたロシア・ハバロフスク地方、モンゴル国については、地域の概要や気候、自然環境、民族文化などについて簡単に説明しました。

次に特別展示室に行き、実際に展示を見ていただきながら、個々の資料について説明をおこないました。多くの参加者の注目を集めたのは、ナーナイの花嫁衣装や魚皮製品、北海道アイヌの樹皮布用織機、ヒツジの骨とフェルトで作られたモンゴルのチェス、全面に刺繍が施されたカザフの壁掛けなどです。一通り説明した後は、参加者それぞれのペースで観覧いただきましたが、気になった資料をじっくり眺める姿も見られました。

(学芸グループ 中田 篤)

新収蔵資料紹介

山口吉彦コレクションについて

数年来、当館で進めてきた「山口吉彦コレクション」（以下、山口コレクション）の収集が、今年度ではほぼ完了します。ここでは山口コレクションの概要について紹介します。

山口コレクションは、山形県鶴岡市にあったアマゾン民族館の元館長・山口吉彦氏が収集した民族資料群です。アマゾン民族館では世界の民族文化を紹介する企画展を開催しており、山口氏はこの企画展のために世界各地で民族資料を収集してきました。これらの資料はアマゾン民族館に収蔵されていましたが、2014年の同館閉館後、北方民族の資料約670点が当館に譲渡されることになりました。

山口コレクションは、おもに次の地域・民族の資料から構成されています（（）内の数字は資料点数）。



花嫁衣装（ナーナイ）

・ナーナイ資料（316点）：1995年7月、11月にロシア・アムール川中流域のナイヒン村などで収集された資料で、伝統的な衣類やお守り、人形などが含まれます。
・北海道アイヌ資料（41点）：1996年頃、北海道白老町、平取町二風谷で収集されたものが中心で、衣類や鉢巻き、まな板

などの木製品、樹皮製のバッグなどで構成されます。

・アラスカ資料（54点）：2000年5～6月にアメリカ・アラスカ州のアンカレッジ、コツェビューなどで収集されたもので、エスキモーの工芸品が大部分を占めています。

・サミ資料（26点）：2000年8～9月にフィンランド・イナリ周辺で収集されたサミの工芸品などです。

・サハリン資料（31点）：2001年にロシア・サハリン州のユジノ・サハリンスクで収集されたウイльта、ニブフが製作した人形などの土産品が中心となっています。

・モンゴル資料（135点）・カザフ資料（59点）：2000～2002年にモンゴル各地で収集した資料で、衣類や毛皮製帽子、玩具、アクセサリなどから構成されています。

山口コレクションは、収集の時期や場所がほぼ特定され、保存状態も良好という点で貴重です。今後は当館で未永く保管し、研究、展示や普及活動にも積極的に活用していきたいと考えています。

(学芸グループ 中田 篤)

ロビー展

石の知る辺

アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド、 先住民シネコックに鯨の物語をたずねて 是恒さくら 本・刺繍・写真展

2021.1.5 - 1.24

宮城県在住の美術家は恒さくらさんの写真、本、刺繍作品を紹介する展覧会を開催しました。是恒さんは人とクジラの関係について関心をもって、日本各地やアラスカをはじめとする世界各地を巡ってきました。本展ではアメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド島に暮らすシネコック・インディアン・ネーションを訪ねた時の記録写真パネル18枚（写真は52枚）と、現地で採話したエピソードやそこから着想を得て制作されたリトルプレス（小冊子）と刺繍作品を紹介しました。



ロビー展の様子

ニューヨーク市の一部を含むロングアイランドにイギリスからの最初の入植者が上陸した時には、少なくとも13のインディアンのグループがいたと考えられているようですが、現在はシネコックとプースパタックの2グループになっています。

是恒さんがシネコックを訪ねたのは、アラスカでの調査時に、ニューヨークにクジラとかかわりのある先住民がいると聞いたのがきっかけでした。

かつてロングアイランドでは捕鯨が行われ、漂着、接岸したクジラも食糧源となっていました。また、入植者たちが行った捕鯨事業に従事したシネコック・インディアンもいました。その後乱獲のためクジラは100年以上ロングアイランド周辺から姿を消していたのですが、最近また見かけられるようになってきたそうです。

展示写真にはシネコック・インディアン・コミュニティーセンターの建物もありました。壁はクジラが描かれた大きな壁画になっています。シネコック・インディアンのシン

ボルマークも向かい合う2頭のクジラになっていて、それだけクジラと縁の深い人びとであることがわかります。

今回のロビー展には、捕鯨の町でもある網走での調査から作られた刺繍作品「網走のカラス」も展示されました。2016年のアラスカで打ち上げられた口先の尖った謎のクジラが、実は網走の漁師たちの間で以前から「カラス」という名前で呼ばれていたクジラであり、新種であったという話が、この作品の契機となっています。のちにこの新種のクジラにはクロツチクジラという名前がつけられました。

会期中の1月10日にはアーティストトークを行い、作品作りの背景について解説いただきました。

捕鯨をする日本から来たということでクジラに関わる人々には歓迎されることも多く、クジラは捕鯨問題での対立のように、人々の分断の理由になることもある一方で、人々をつなぐ役割もするなど多面性をもっている。そうした各地のクジラの話を集め、クジラのイメージを、作品作りをとおして作り直すことを試みていることを話されました。

なおシネコックとは「石の多い浜の人々」を意味し、是恒さんが撮影した写真には大小さまざまな石や岩が写り込んでいました。



アーティストトークをする是恒氏（左）



リトルプレス『ありふれたクジラ Vol.6:シネコック・インディアン・ネーション、ロングアイランド』原画刺繍

（学芸グループ 笹倉 いる美）

ロビー展

オホーツクシリーズ⑭ 北の状景から

2021.1.5 - 1.24

オホーツク地域の文化・自然を紹介する展示「オホーツクシリーズ」の14回目として、例年この時期恒例の写真展「北の状景から」を開催しました。

今回は坂森ナミさん、橋本郁弥さん、橋本敏一さん、三浦奈津美さんの4人に、それぞれ10点ずつ出展いただきました。

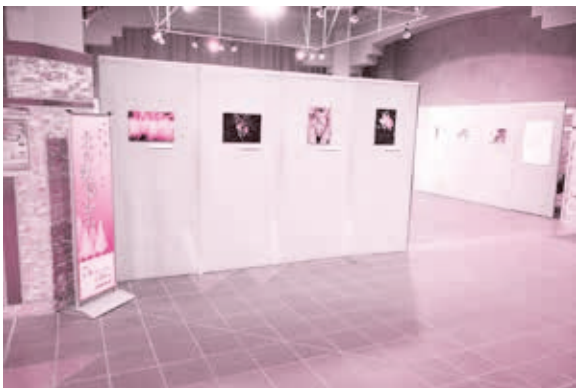
坂森さんの作品は特に冬の白銀の世界の美しさが印象的でした。木々が霧氷をまといながらも、明るい日光に照らされる様子は、極寒の中でも暖かさを感じる不思議な印象を与えてくれました。

橋本郁弥さんの作品はオホーツクの風景が中心でした。この地域にお住まいの方に「あっ！あそこの風景だ！」と思わせる写真も多く、生活の中に溶け込み、普段はほとんど意識していない日常的な風景の美しさを、改めて気付かせてくれる作品でした。

橋本敏一さんには今回初めて出展頂きました。出展いただいた作品は全てエゾモモンガとシマエナガが被写体でした。まん丸な目をしたエゾモモンガたちの愛くるしい姿に心を奪われた来館者も多かったのではないのでしょうか。オホーツクに暮らしていても、エゾモモンガは簡単に観察できるわけではありません。彼らの決定的瞬間をレンズに収めるには一体どれほどの努力が必要なのかと思いを馳せながら鑑賞しました。

三浦奈津美さんの作品は野生動物の写真と風景が被写体でした。こちらをまっすぐに見つめるキタキツネの写真が特に印象的で、シャッターを切った時の静寂が伝わってくるように感じました。

コロナ禍の状況ではありますが今回は合計338名の観覧者がありました。オホーツクの暮らしや風景の美しさに改めて感じ入る写真展となりました。



会場の様子

(学芸グループ 野口 泰弥)

講習会

初めての歩くスキーツアー

共催：道立オホーツク公園

2021.1.16 10:00-12:00

会場：道立オホーツク公園

講師：中田篤（当館主任学芸員）

藤本幹人氏・中川一弘氏（網走スキー協会）

この催しは、北方諸民族のスキーに関する解説と歩くスキーの体験を通じ、北方の移動手段として発達してきたスキーについて理解を深めていただくという企画です。

まず、オホーツク公園研修室で、北方民族のスキーについて中田が紹介しました。最初に伝統的なスキーやかんじきの形や分布についてお話しし、その後ロシア・ハバロフスク地方の先住民ナーナイのスキーを見ていただきました。スキー裏側に動物の毛皮が貼られており、登り坂では毛が雪面にひっかかって後退しづらくすることを説明しました。



歩くスキーを楽しむ参加者
(提供：道立オホーツク公園)

次にスキー協会の方々にはバトンタッチし、歩くスキーの体験に移りました。オホーツク公園で貸し出しているもののなかから、歩くスキーとストック、靴を選んでもらいました。スキーは身長+20cm程度、ストックは垂直に立てて脇の下にくっつくくらいの長さが一般的とのことです。

そしていよいよ歩くスキーの体験です。全員で屋外に出てスキーを履き、歩き方のコツを聞いてからコースを進み始めました。歩くスキー裏面の中央部にはウロコ状の加工が施されており、その部分に体重をのせると滑らないようになっています。片方のスキーをぐっと踏みしめて雪面を蹴り、もう一方のスキーを滑らせて進んでいくのです。

スタートしてしばらくは登りが続きます。「初めての…」という催しですが、参加者のなかには歩くスキー経験者もいて、登り坂もスイスイ進んでいきます。一方で、今回が初めてという方は、最初はなかなかスムーズに進めない様子でした。登りが終わると次は下りです。下りでは何もなくても滑っていきませんが、スピードが出過ぎて転んでしまう人もいました。

当日は晴天に恵まれ、歩くスキーには絶好のコンディションで、参加して下さった皆さんに楽しんでいただくことができたと思います。

(学芸グループ 中田 篤)

北海道立北方民族博物館研究紀要 第30号目次
令和3年(2021年)3月刊

<研究ノート>

日下稜、原田亜紀、杉山慎

北グリーンランド、チューレ地区で使用されているグリーンランドイヌイットの毛皮衣類と毛皮を利用した狩猟道具の素材と機能

中田篤

トナカイ橇とスノーモービル：サハ共和国タイガ地域のトナカイ牧畜における事例より

野口泰弥、大島稔

日本人によるアリュート民族の研究(3)：服部健「アリュート語資料」(1)

<資料紹介>

宮本花恵

明治期のロシア正教会による北海道宣教：ニコライとセルギーの日記に注目して

<資料>

笹倉いる美

のりすすと2020：北方研究データベース

『北海道立北方民族博物館研究紀要』第1号～第29号総目次

ロビー展「A.V.スモリヤーク写真展 ロシアの民族学者がみた1950～70年代のナーナイの暮らし」

ロシアの民族学者アンナ・V・スモリヤーク氏が、1950年代から70年代にかけてアムール川地域で撮影した写真を紹介します。

会期：令和3年(2021年)4月24日(土)～5月23日(日)

会場：北方民族博物館ロビー

主催：北海道立北方民族博物館

観覧料：無料

関連事業

令和3(2021)年5月1日(土)

13:30-14:00ロビー展解説会

令和3(2021)年5月16日(日)

10:00-11:30

講座「古代岩画に魅せられた人々～シカチ・アリヤンのナーナイと観光者」

講師：井出晃憲氏

(稚内北星学園大学/准教授)



ナーナイの女性シャマン
(1872年、ダエルガ村)

INFORMATION

行事報告

◆1月23日(土)はくぶつかんクラブ「かんじき体験」(講師：野口泰弥学芸員、平栗美紅解説員)を開催しました。



うまく歩けたかな?



雪で遊ぶ参加者

◆2月2日(火)～2月7日(日)学芸員実習として4名の実習生を受け入れました。

◆2月20日(土)はくぶつかんクラブビーズおり体験(講師：平栗美紅解説員)を実施しました。



じょうずに作れたね!

◆3月6日(土)はくぶつかんクラブ北の動物で簡単ホワイトボードづくり(講師：菅原章子解説員)を実施しました。



完成した作品を手にする参加者

目録の発行

北海道立北方民族博物館資料目録16「山口吉彦コレクション」を発行しました(1月20日発行)。

職員の異動

[退職(任期満了)]

令和2年(2020年)12月28日

宮本花恵(学芸員)

エントランス改修工事

令和2年(2020年)8月1日より行っていたエントランス改修工事が12月18日に完了しました。

北方民族博物館だより
No.120

令和3年(2021年)3月17日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会